

講演

韓国の民主化運動と日韓キリスト教 ——TK生の記憶

池 明 観

日時：2015年6月20日（土）15:00-17:00

場所：明治学院大学白金校舎

はじめに

今回このような講演の機会を与えてくださり、誠にありがとうございます。

今日は、韓国民主化運動と日韓キリスト教の関係について、わたしの個人的なことも絡めてお話しさせていただきます。わたしはこのところしきりに「歴史的事実」と「書かれた歴史事実」の間のギャップあるいはジレンマについて考えるようになりました。

本日の中心テーマであるTK生の時代について、わたしは岩波書店の雑誌『世界』の1973年5月～1988年3月号まで15年間にわたり執筆し続けました。わたしが49歳から64歳までの間に、日本の読者に向けて韓国の状況を語ったのです。その後、韓国は民主化され、わたしは東京女子大学教授の定年を終えて帰国しましたが、TK生であったことを告白、公表しませんでした。しかし、雑誌『世界』からは匿名のままにしておくのはよくないので、公表しなければならないと言われ、隅谷三喜

男先生からも事実を明るみにしたほうがよいということで、15年後の2003年9月号において自らをTK生であると告白しました。その時は80歳でした。

それから14年の歳月が流れ、わたしは韓国で多くの講演をしました。TK生のことについては全く触れませんでした。それには色々事情はありますが、やはり韓国国内の状況においては、TK生という存在が「ない」という主張を説明するのにかなり努力が必要だからです。日本では、これがTK生に触れる2回目の機会です。思い出したくないという一面もあり、その辛い時代をどのように解釈してよいか分からないというのが率直な気持ちです。

1回目に語ったのは2003年の「TK生の時代と今」、「東アジアの平和と共存への道」という題での講演でした。その際には、「韓国の民主化運動と日韓キリスト教—TK生の記憶」ということで話したのですが、実際このTK生を中心として当時の日本、韓国における民主化運動をサポートする運動について語りはじめるとキリがなくなり、加えてアメリカのこと、日韓文化交流、韓国の状況についても語るとすれば、十分な時間がとれないことに気づきました。

一言だけお話して本題に入りますが、「TK生の時代と今」と題する講演の中でわたしは、当時行われていた所謂六者会談に触れました。現在は中断されていますが、六者会談というのは、南北朝鮮、アメリカ、中国、日本、ロシアが参加し、南北朝鮮について北京で語るという会談でした。わたしは次のように述べました。

「政治家たちが行っている六者会談に対して、それほど信頼をおいていません。この講演で申し上げてきたように、政治家というのは人間の問題を真に考えていないと思うからです。それは、南の政府に対しても同様です。本当にヒューマニズムに戻り、考えなければいけません。熱いヒューマニズムを持っているならば、六者会談に参加する人々はあ

種の感動を与えてくれるでしょう。適当に政治的に交渉するやり方はやめてほしいのです。」

それほど政治そのものは人間の本当の思いに触れてくれないものだということを、日韓問題に長く関係してきた経験から考えるようになりました。その講演では、日韓関係をヒューマナイズしなければならないということも述べました。「例えば、美術展を開催する場合、東京、京都、仙台、札幌と回るが、これからはソウル、釜山を回るのが当然な時代、そしていつかは北京、上海でも自然と開催できるような時代、これが我々の望むような時代ではなかろうか。郵便局のふるさと便がアジア便になれないだろうか。」

かつて執筆した「韓国からの通信」を今読むと、非常に叙情的なおいがします。わたしはそうした叙情的な友情の時代を望んでいます。これまで日韓関係の希望へと向かわせることを検討してきましたが、今や希望に向かって前進するのではなく、政治的には日韓関係が中断されているような状況にあります。しかし、市民の往来は続くので、歴史は中断されずに進んでいくものだと思っています。このような話を前提として本論に入ります。

「カイロス」から民主化運動を考える

本講演を依頼された時に、「カイロス」というギリシャ語聖書に伝わっている言葉を思い出しました。日韓関係を考えながら、そして1970年代以降の時代を思い出すと、「カイロス」の神学に思い至ります。カイロスは、終末論的な時間に満たされた「時」です。キリスト教は、いかなる宗教と比べてみても時間と歴史を重んじる宗教です。カイロスについて、コリント人への第一の手紙4章5節はこう語っています。「ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇

の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります。」聖書的に考えると、それを我々が現実の歴史に適用した場合に、カイロスは革命の「時」であり、革命の場が展開される「時」であり、革命の事件が行われる神の「時」、歴史の「時」と言えるのではなからかと思えます。

今でも不思議に思うのですが、韓国の民主化運動が展開されたあの時代は、歴史的に熟していた時代でありました。歴史は進んでいくが、ある時点になると円熟した時代、あるいは集中的に「神の御業」が現れてくる時代が来ると思えます。どのように熟していたのかと申しますと、当時のキリスト教のネットワークが未だかつて見られなかったほど円熟していたのです。1970年代～1980年代の20年間に歴史的に自然に現れたとも言えますが、神学的にはそういう時代を神様が来らせたもうたとも考えられます。

革命の根底には人間ひとりひとりの個人と個人の結びつきがあります。あの時代はそうした個人個人がつながる豊かなネットワークが存在しました。韓国においては、NCC (National Christian Council) の金観錫、ジュネーブのWCC (The World Council of Churches)、ドイツ教会、そしてアメリカにはNCCの李昇萬幹事がおりました。そして、日本には中嶋正昭先生や東海林先生がいらっしゃいました。なぜこういった珍しい人間関係が可能であったかは分かりませんが、彼らは自然と結びついて深い関係が展開され、それがオーストラリア、北ヨーロッパなどにも影響を与えたのです。

そしてその中にわたしも含まれることになります。当時わたしは1年の留学のつもりで来日し、帰国したら軍事政権に服従しなければ逮捕される状況下でありました。その1年の間に韓国の状況は厳しくなっており、先ほど述べたネットワークの中に巻き込まれていく時代でした。そのネットワークの中心、そして革命の中心は日本、すなわち東京であり

ました。最初はEメールもなく、ようやくFAXがあらわれました。全ての各国における戦いのインフォメーションが人によって運ばれ、そしてそれが全世界にネットワークを通して広がる時代でした。いわば、まれにみる人間的連結によって、インフォメーションが運び出され、世界の運動の中において国内運動を引き起こす時代であったと言えます。

1970年代と1980年代の韓国の革命に比べると、今日の革命はだいぶ異なってきています。飛行機による交流は当時もありましたが、今のようコンピュータの時代ではありませんでした。いわば、コンピュータメイン時代の前夜の運動であったのです。世界的に情報が共有され、韓国国内の情報も共有される時代が生まれたこの先はどうなるのか。情報量が多くなれば、革命の危機は無くなると言われていました。「これからの社会における革命はどういう形をとるのか」、ということを考えていかなければなりません。

1970年代から1980年代にかけて、世俗的には韓国は革命の時代にあったわけですが、それを政治史的にどう継承するかが問題になります。一方で、この時代は教会的には神学の時代でもあったと思います。民衆の神学が盛んになり、それを継承しながら教会が力を発揮していったのです。その次にたとえ沈黙の時代が来たとしても、歴史における革命的なものは続きます。それぞれの時代の意味は決して消し去られるものではありません。

教会の内と外

1970年代から80年代は、キリスト教徒と一般的社会が連帯した時代でもありました。そのことをお話するには、岩波書店『世界』の当時の編集長であった安江良介さんについて語らなくてはなりません。最初に彼と会ったとき、安江さんは「教会は社会の外にある少数の集団にす

ぎない」と言われました。しかし同時に、社会的良心形成のために、教会はいかなる働きができるのか、少数派の教会の在り方について新しい証言が生み出されようとしていました。我々は国内勢力の保護のためにも、北朝鮮との関係を出来るだけわきに置き、韓国内の保守的教会に配慮しながら、その路線、つまり教会が社会的良心を形成するという線から外れない努力をするという考えを持っていました。

「韓国からの通信」の立場は、徹底的に教会主義的であります。教会内に向けては、我々は韓国教会を革命勢力の中へ編入しなければならないわけで、そのために軍部の独裁権力は反キリスト教的サタンであると規定しなければなりません。特に国内の保守的教会に向けてです。そして、出来るだけ、政治的ではなく教会的な運動であるというような装いを保とうとしたわけであります。もうひとつ重要だったのは、軍事政権がわたしたちに、自分たちの反対する勢力として「赤」のレッテルをはらないようにさせることでした。そのためには、国内教会を保護し、国際的連帯が決して左翼的でないということを強調しなければなりません。そのとき引用した言葉は、「エクレシア」です。エクレシアは教会という意味です。我々は非常に行動的、革命的、政治的な行動をするが、教会本体からは決して離れないという主張を展開しました。そう主張しつつ、北朝鮮への批判を差し控えました。我々を支援する日本のグループの中には、北朝鮮に寛容な勢力はいくらでもありましたが、政府に反対する勢力は赤ではないのかと疑われないよう慎重にことを進めましたが、時には誤解も受けました。ですからなおのこと、徹底して自分たちは教会的であるという立場を取らざるを得なかったのです。端的に言えば、日本には「先統一、後民主化」という考えが現れたが、我々は徹底的に「先民主化・後統一」という立場を固守しました。

国際化と韓国民主化運動

すでに申しあげたことと部分的に重なりますが、あの時代は、韓国の民主化運動を世界化したい時代であったと申し上げてよいと思います。この戦いを支援するために、ほとんど主な各国に支援の本土ができ、それが各国のジャーナリズムに影響を与えました。日本では、韓国の民主化を支持する方々が銀座で堂々とデモ行進を展開しました。革命的エネルギーが結集した「カイロスの時代」と言えます。

この状況下で、東京の役割はなんであったか。雑誌『世界』、キリスト教会、カトリック等があり、東京は韓国民主化運動の前哨基地であったのです。獄に収監された人々を支援したり、韓国独裁政権への援助を停止するよう日本政府に働きかけたりしたわけです。韓国国内の軍事政権は、1972年10月いわゆる「維新」を宣言して、自分の独裁政権を持続しようとした。金大中が拉致され、行方不明になった挙句、突如自宅前に現れるという推理小説のような事件が起きたのは、その二月前です。こうした韓国の暗闇からのニュースを、東京が全世界に発信したのです。わたしの「韓国からの通信」は、いわばこの情報の解説記事を書き続けたものでした。『世界』が日本国内に知らせるとすれば、キリスト教雑誌『福音と世界』は教会内に知らせることとなったのです。世俗的側面においては、『世界』が働いてくれ、信仰的側面においては、『福音と世界』がこれに参加してくれました。全世界の教会がたがいにつながり助け合っていることが示されたのです。

民衆の神学は、この時代におけるキリスト者たちの戦いを神学的に理解しようとしていました。そうした熱気が満ちあふれていたのです。1973年5月20日に韓国で「韓国キリスト者宣言」が発表されました。これが韓国に教会が全面的にこの運動に参加するシグナルであったわけ

ですが、当宣言は実際には1973年1月頃に東京で作成されました。維新体制というのは、実際には独裁の絶対化であり、邪悪な群れがその支配と利益のために作り出した国民に対する反逆であると規定されます。当声明は徹底的に信仰的宣言であらうとしました。左翼の攻撃を避けるためでもありました。この声明に署名した人々の名前は一切公表されませんでした。雑誌Christianity and Crisisが声明文を正式に発表してくれました。無記名の宣言書を公式に発表したのは、同意というか真意を表明することでした。そしてそれを可能にした条件は、韓国教会の地下組織が日本と連絡をとっていたことでした。

ところがしばらくの間は、実際に教会は動いているのに、反体制的な動きが行動として表面に現れてこない状態が続き、そのことを東京の支援者たちも心配していました。けれども1973年10月2日、ソウル大学において304名が独裁体制に反対するデモを起こしました。これは、海外の動きとともに国内のキリスト教学生が背後で動きを示した出来事でした。学生たちは、今の政権の維持か、国民の奴隷化か、を問う声明文を発表しました。このデモを機に、海外における民主化勢力のネットワークが拡大し、国際的になってゆくのです。

この時韓国と世界を媒介したのは日本でした。世界的な新聞記者たちが東京に来て、オリエンテーションを受けてソウルへ向かいました。東京において、運動への資金援助、支援、作戦への協力をしたことは、歴史上初めてのことであると考えます。できるだけ韓国の独裁政権が崩壊するように導いたのです。

ところで、民主化運動が国際化されたネットワークによって世界中に発信される過程で、実際に起きたことが事実よりも拡大して報道されることがありました。はたしてそれは許されるのでしょうか。事実をオーバーに報道すると、政府は大変なことだと考えオーバーに対応するため、問題が深刻化し、緊急措置が発動されることになります。1974年1月8

日に緊急措置1号～9号までが発令されました。例えば緊急措置の1号は次の通りです。「維新憲法の規定に反対，歪曲，誹謗することを一切禁ずる。その行動をした者は15年以下の懲役にする。」その結果，韓国社会は緊急措置体制下の暗黒時代へと陥りました。

このことを回想した時に，晩年になったせいか暗い気持ちになる場合が多いです。人間が生きるということは罪だなという気がしてきます。現実の事件を実像よりも巨大化してしまう，そしてその過程でも多くの人々が亡くなりました。民主化運動のために自殺をしたのは，64人に及びます。これに対し，外における勢力が扇動したと言えるのではないかと考えると，暗い思いにかられます。

しかし反面では，その事件を巨大なものにして全世界に知らせ，それによりまた国内勢力を激励することにもなりました。この運動を教会と世界教会と世界の世論のもとに保護しようとする，或いは励ますやり方です。そのために，東京がアジア民主化運動の基地になり，朝鮮と韓国の民主化運動の民主基地となっていました。そして，市民の力で独裁政権を助けている日本政府も，その手を後退せざるをえないところまでもっていったのです。歴史的経験の中において，日本の国民が政府の言いなりになる国民ではないこと，韓国でもアメリカ（レーガン政権）でもそうですが，国民が政策の修正を命ずるという時代であったのです。そして，ついに韓国の軍部政権が倒れたわけです。

なぜそれが可能だったのでしょうか？それは独裁政権下にありながらも，韓国が国際的に開かれた社会であったから可能であったと考えます。日本，アメリカ，国際的な支援がなければ，勝ち取れるような闘いではなかったということは素直に認めなければならないのです。こうした国際化という手段がない場合，たとえば北朝鮮は国民の弾圧を極度まで強化することが可能でしょう。今後，韓国とよく交流するようになり南北統一すれば，北朝鮮は南とうまくいくに違いないと言えます。とも

あれ、民主化は、決して韓国の人々が偉大であったから達成できたわけではなく、あくまでも国際的枠の中において実現されたものでありました。

革命神学

今度は、信仰的に見て今日の革命の時代をどうとらえるかを「革命神学」という題で考えてみたいと思います。それまで民主化運動に参加していた人々は、韓国の革命が成功したあかつきには、政治はもうこりこり、教会に帰ろうと考えました。人々は教会に帰り、学生は大学に帰るといのように。ある意味、勝利に楽観的でもありました。後日、わたしは歴史の展開を見ながら、民主化のために何度もお互い手を握り合って、運動に参加する人々が統一勢力を形成していた時代に郷愁を覚えしました。我々はその組織を解体せずに、世界的なものにしてゆかなくてはならないのではないかと、自分に問いかけました。思想家であるハンナ・アーレントの著作『全体主義の起源』には、「いかなる革命であっても成功した革命はない」と書かれています。アーレントはまた「革命前の高揚した人間と、革命後の退廃した人間」という言葉を使用しています。これからの社会的歴史の中において、社会の革命的变化、或いは、よりよき社会のために我々はどのような道を歩むべきか。

そう考えていましたが、最近になって「市民的政治の時代」、政治と市民の関係の新たな設定という概念を思いました。この頃日本に来て、国民と政府の間は非常に変化していると個人的に感じます。今日の韓国では、どうしてか独裁者の娘を大統領に選ぶという保守主義が見えます。しかしわたし自身は、歴史は革命と反動を反復しながら前進するものであると考えようとしています。例えば、今の時代でも体制は民主的であって、決して専制的ではないのに、国民は独裁を許しています。

このように革命が前進と後退、アップダウンを繰り返すのが歴史であり、歴史の中でわたしたちは、革命の失敗を重ねつつ勝利へと導かれる、これがわたしの信念であります。やはり歴史は前進してゆくのです。

韓国教会が経験した危機の時代とその後

ここで、韓国教会の3つの危機の時代について述べます。一つめは、危機が信仰的・神学的な前進をうながした日本統治期です。日本統治末期になると、朝鮮の教会は日本の完全な支配下に入り、旧約聖書を読むことや説教を禁止され、日本語のできない教職は追われました。幼い頃を思い出すと、刑事が教会に座っており、説教の中に日本の統治に逆らうような批判的な言葉があると、「停止！」と叫び、牧師が説教を中止して他の話をしなければならないことがありました。神社参拝の強要の時代もありました。その中において、信仰的に、わたしにとってはほとんど神学的な反応ですが、保守信仰になることは不可避的だったと思います。信仰の幻をえがくような時代です。そうしながら、神社参拝反対のために捕えられていく時代であったわけです。

二つめは朝鮮戦争の時代（1950年からの3年間）で、これは非常に反共的・神秘主義的な時代でありました。今、韓国では早朝の祈祷会が習慣化されていますが、これは朝鮮戦争時代にでてきたものです。

そして、三つめの1970年代の民主化時代が到来します。民主化の時代に至ると、教会は内側に籠らずに、政治的・行動的になったと言えます。しかし、今はこの危機の時代が過ぎ去り、中産層は経済的豊かさや個人生活の充実に関心を向けています。信仰的には安易であり、より後退している時代であると考えべきではないでしょうか。

さて、ここでさらに日韓教会関係現代史、つまり1973年頃から1980年の終わりまでの15年間を考えたいと思います。これは、日韓関係史

の中にほとんど見られなかった共闘の時代でした。1998年～2003年までは、日韓関係が政治的に非常に前進しました。教科書問題のために2001年には1度頓挫しましたが、それを乗り越えて前進するわけです。その時わたしは、日韓文化交流会議の責任を持っていましたが、日本の文部省と意見交換をし、教科書に対して配慮をしてもらいましたので、日韓関係を再開すべきであると判断しました。いっぽうで、日本文化の導入が中断されるという事態も生じましたが、わたしは直ちに「日韓関係における教科書問題はもう終わったのだ」と声明を出しました。わたしは政府とは何の利害関係も持っていませんでしたが、大統領は日本の文部省が教科書を再考したといっても、日韓文化交流会議を再開してよいと宣言できないのです。わたしは勝手ながら、「日韓関係は修復されなければならない。韓国への修学旅行を再開してほしい。反日運動はないので、安心して旅行に訪れてほしい」と宣言しました。このようなことができたのは、政府も内心では同じように考えていると思ったからでした。

近年の日韓関係の頓挫した状況を眺めると、色々なことを考えさせられます。一つのエピソードがあります。従軍慰安婦だった方に、「日韓文化交流会議において、従軍慰安婦問題を話し合ってください」と依頼されましたが、わたしは「日本はそれを政治的に解決する能力を持っていない国です。しかしいつか将来、日本も解決できる政府を持つだろう。」と答えました。わたしたちはその問題を理由に日韓関係を頓挫させることはできない、まずは関係を前進させながら成熟する時代を期待すべきだからです。マイナス面を拡大せず、プラス面を評価しつつ前進すべきだと考えています。エーリヒ・フロムも、「人生において生きている間に、マイナスのものに目を付けてそれにこだわってはいけない。出来るだけ、人生においてはプラスの方向を見ながら前進しなければならない。」と述べています。これは、日韓関係においてもそう思

います。これからも問題は多いかもしれませんが、マイナスにとらわれることなく、プラスの方向を目指しながら、ちらちらとそれを（マイナス面を）眺めることが大切です。これがまさに我々のとるべき姿勢であります。教会がまずそれを示さなければなりません。

時代の先駆者としての教会を目指して

教会は、先ほどエクレシアについて話をしたのですが、戦士を送り出すのが教会であり、そしてその戦士を送り出して、彼らが帰ってくれば、彼らを労わり元気づけ、彼らの話に耳を傾けるのが教会です。教会は御言葉を伝えつつ、歴史を見直してゆかなくてはなりません。若いときにわたしは、ユニオン神学校で次のような忘れがたいことを学びました。御言葉を語る教会は、歴史の中の教会です。世の中と交わる教会であり、歴史に対し責任を持ち仕える教会です。1970年代や1980年代の古い世代の人々といえども、教会の一角を占めて語り合う教会でなければならないと思います。そのために、我々は2000年も前の言葉を繰り返すではありませんか。

教会の中で、日韓間に言葉が途絶えていたにもかかわらず、この時代に我々は語り合ったことを確認すること、日本においても韓国においてもこのような歴史を若い世代に語り伝える教会であってほしいと考えます。特に、日韓の教会で交わりを回復した時代のことを語り合うということです。1970年代中期～1980年代後半までの時代は非常に重要です。この間に我々は権力に立ち向かい、世界の教会との連帯を語り合いました。まさに世界の教会から大変な資産を受け継ぎ、それによって教会が語るべき言葉となすべき行動を生み出した時代だったのではないのでしょうか。

保守反動の勢力は継続し、この勢力が国民を保守反動につなぎとめ

ようとしている現在、ますますその言葉が必要ではないでしょうか。一見問題がないように見える時代であるからこそ、ますますその言葉を大事にし、日韓が出会い、語り合っただけでゆかなければならないのです。わたしは、いつかは再び革命の時代がやってくるという思いを抱いています。もちろん韓国と日本との違いや、韓国の今の世代は日本語があまりできないことなど、それらをどのように克服してゆくかという問題は無視できません。

わたしは、中国のことはあまり知りませんが、宣教のフロントとして巨大なエネルギーを蓄えている中国の教会について考えなければなりません。かつてわたしが日本で書いた本『教会がいかにか成長するか』のなかに、次の一節があります。「どの教会（特に日中韓）も地下教会として始まり、地上教会になり、その後は政治等に触れてはいけない沈黙の教会になり、しかしいつかは時代によって闘う教会に成長し、そして協力する教会になる。」

わたしは、この世を生きることは非常に苦しいと感じます。苦勞の連続の世界を生きています。しかしわたしは、この苦しみを聖書的にとらえ「他者への関心がないときは、我々は人生の意味を感じるができない」と述べたいと思います。現在の一言平和な時代に韓国の教会と日本の教会が語り合い、やがてそこに中国が参加すれば、たとえ政治は保守傾向に走りつつけるとしても、教会は東アジア共同体の先駆となるのではないのでしょうか。教会は、政治よりはるか前を見据えて、時代の先駆者となるのです。地下教会から地上教会、そして沈黙の教会、さらに闘う教会、そしてもう一步前進して政治に先駆する教会です。

「政治に先駆する教会」。私たちが友情を温めながらアジアの課題を考える教会こそが、我々が望むべき教会です。

長い時間、ご清聴ありがとうございました。

【コメント／質疑応答】

◆わたしはたまたま西早稲田のキリスト教センターの近いところに学生と一緒に過ごしてしまっていて、キリスト教研究会にも参加していました。

それから、20人で「キリスト教メッセージ」として政府批判の声明を発表しようとしたのですが、どこから情報が漏れたのか、声明を出すことができませんでした。しかし、韓国人の人々はこのようなことはいくらでもあると明るくおっしゃいました。わたしは、韓国人達の楽天性、必ず未来は拓けるという意志に驚きと感激を受けました。

今、池先生がお話していました従軍慰安婦問題ですが、これを知らせてくれたのは韓国の女性たちでした。力いっぱい世界的に広げていき、日本がどんなに間違ったことをしたのか、しかもそれをどこまでも認めようとしないのはどういうことなのかと問われて、日本の女性も変わりました。そして遂に、アジア国際女性法廷（2010年）で天皇有罪が確定しました。

私事ですが、その件について表彰を代理で受けることになり、表彰の場で5分間話すことになりました。そこで、韓国の女性たちが講義してくれました。そして、わたし自身は天皇制の中にとどまっている人間だと実感したのです。日本人の男尊女卑です。いくら言っても、理屈をつけて聞こうとしないのです。なので、天皇有罪を世界中に認めさせたことは、非常に大きいことなのだと思います。

◆本日は、大変勉強になりました。韓国教会の三つの危機をもう一度説明していただきたいです。

池先生 一言で申しますと、宗教の福音とは、実に危機の福音だと思います。危機になると、危機的な言葉を聖書の御言葉から引き出して、それで生きていくことは意地らしいというか非常に大事です。

あの人たちはファンダメンタルだと決めつけてしまうのではなく、その自分たちの生き方や聖書の中で生きざるを得ないととらえるべきです。しかしその一方で、ものごとを幅広く考えることが可能であるという人たちが存在します。危機という時代は、聖書の御言葉の中において非常に狭い意味での聖書の捉え方をせざるを得ない時代であると思います。それを絶対化するのではなく、相対化して、あの時代はあの言葉で生きていたのだというのがわたしの考えです。

◆「TK生」の「TK」とは、「韓国からの通信」や「池明観」先生の名前からとったものなのでしょうか。

池先生 わたしの名前とは関係ありません。安江良介さんがつけたものです。「近くて遠からず」というように思っていたいただいてもよいです。

◆池先生は、「政治に先駆する教会」という大きなビジョンを語られました。特に、教会が東アジア共同体の先駆となる可能性、国家の垣根を超えて先駆となる可能性をおっしゃいました。今の日本の教会を見ると、非常に内向きになってしまっているのではないかと思います。少なくとも周りを見ますと、教会を通じて東アジア共同体を結成するような機運がしぼんでいるような気がします。池先生は、日本に限らず韓国でも、そういう機運や根をどのように見ていらっしゃいますか。

池先生 自信のあることは言えませんが、カイロスの的な「時」というのは我々の予期しない時にやってくるし、色々な形で漠然とやってくる時もあります。指導的先駆者は、それを見通し予想しながらやるべきです。予想しながらやると、そういう時代が早目に来ます。予想しないでいてもそういう時代は必ず来ますが、我々が予想して準備をすれば早く来る

と思います。人間的な話し合いを進めていくと必ず来ます。これが人間の役割です。教会が弱いと悲観的に考えずに、希望を持って生きることが大切です。本日お話ししました1970年代～1980年代のことは、誰も予想していなかったことなのです。

ただ、メディアが非常に変わってきましたし、アメリカはメディアを大きくすれば抵抗勢力がまとまることはないから安心だという時代です。よって、将来どうということがきっかけとなり、どういう形でどうなるかは予想できません。

わたしは今、歴史に対するひとつの恐れというか驚きを感じています。今まで90年近く生きてきて、ようやく言えるような気がします。どこからなにがやってくるか分からないような時代が展開していくのです。例えば、日本でも韓国でも教会がやや下火になっているのは、どういう意味を持つかわかりません。いつ何時、政治などが思わぬ失敗をするかもしれません。この歴史の不可思議さというか、神の歴史の前で恐れおののきながらその日を待つというのでしょうか、今まで生きてきてそういう思いにかられるのです。

◆池先生が、民主化の条件の一つとして、韓国が開かれた社会であったということが重要とお話しされ、わたしもそれに同意します。

先生の本も読み、1980年から1982年まで韓国に留学しました。正直、韓国は暗黒社会だと思っていましたが、韓国人の仲間が政府批判等をはっきり言っていました。当時の韓国が開かれた社会であったことは予想外でした。その後、韓国が民主化された時に、あのような学生たちが自由に語れる場が非常に重要な働きをしたのだと思っています。そのときに、これは韓民族の特性だと思いましたが、ではなぜ同じ民族の北朝鮮はそのようではないのかと疑問に思っています。北の中ではなぜうまくいかないのでしょうか。

もうひとつは、「先駆する教会」、「教会の危機」についてです。かつて民主化を担ったキリスト者やキリスト教会指導者の中にいわゆる「ニュー・ライト」に転ずるような動きが見られます。これは、どう考えればよいのでしょうか。韓国教会が先駆する役割を果たすときに、それがどういうことになるのでしょうか。キリスト教の危機といったときに、更に保守化してしまった部分が今日のキリスト教の危機と言えるのではないかと思います。

池先生 北朝鮮は一言でいえば、人間が抵抗する余地のない所であり、徹底的に閉鎖された社会です。北朝鮮に対する何が変われば、変わるでしょう。しかし、そのままにしておけば変わることはできないと思います。その可能性があるかは、東アジアの政治を担当する政治勢力の問題なので、我々の考えるべき余地はありませんが、時間がかかるでしょう。しかし、そうならざるを得ないでしょう。これからの中国とアメリカの関係に注目すればよいと思います。両国の関係が変化するような時代が来れば、次は北朝鮮の関係だと思います。

民主化運動をした人々は変わるということですが、人間とはそういうものではないのでしょうか。政治家はもっとひどくて、教会関係の人はまだよい方です。人間はこうであるけれども、時代の嵐があれば、全て関係なしに大きな変化の嵐に引きずられます。よって、このような人の存在が人間社会の普遍的な姿なのだと思います。

しかし、そのために意志そのものを怯ませることのないようにすることが大事です。自分の考え方や判断によって、あの人はダメだと思ふことがあるでしょう。しかし、話し合ってみると、そうではなかったという場合が多々あります。それが、民衆の姿であると思います。なので、わたしは人間は皆よい人だと考えます。状況によっては、自分の考え方や生活や存在と絡み合って変わっていくものだと思っています。